



Mar. | 2024
沖縄開教本部通信
vol. 110



ハイサイ 沖縄

第4回

今こそ日本本土の人々

(マジヨリテイ) が立ち上がる時！
―構造的差別の解消のために―

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと



沖縄県民の人口は日本国民中の1%、百分の一です。本来は百人で抱えるべき荷物のほとんどが一人に背負わされている。しかも歴史的長期間にわたる過密集中状態。この一人が九十九人に向かってどんなに訴えても、その声を受け止められない。動き出す人がいない。そうであれば、沖縄がどんなに声を枯らして叫んでも、事態は変わらないでしょう。物理的に考えて当然のことです。もうこれ以上沖縄だけで何かをやっても何も変わらないと思います。もう疲れてしまいました…

とはいえ、本土で立ち上がった人々はいるので。沖縄の人々を苦しめ続けている基地問題は日本人の問題なのだ。自分たちこそが当事者として立ち上がらないといけない

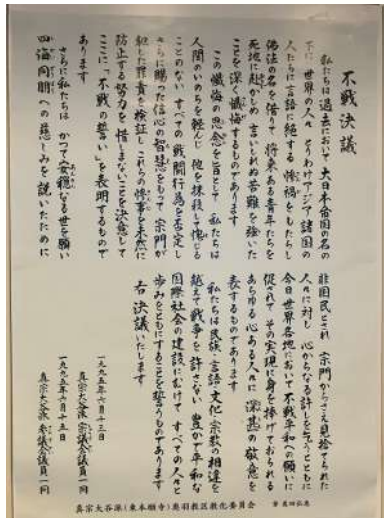
なのだ。もう沖縄の人だけを頑張らせるのは終わりにしよう：こう公言して立ち上がった人々が、全国に散在しています。大きな団体に属しているわけでもない、非力な一個の個人の方々が、世間の冷ややかな目に耐えながら問題当事者としての責任を果たそうと頑張っておられます。このままでは、この人たちもいずれは疲れはてて倒れてしまおうでしょう。

沖縄には「いちやりばちよーでー」と言う言葉があります。「出会ったものは皆きょうだい」と言う意味です。きょうだいに無視される。きょうだいが傍観して何もしない：これほど悲しく苦しいことはありません。

日本政府は沖縄に新しい基地を作るために辺野古の海の埋め立て工事を強行しています。基地を作るために沖縄の Mother Nature(母なる自然)を埋めるといふこと

は、沖縄と日本との間に埋め戻すことのできない不可逆的な深い溝を掘ることになるでしょう。
真宗大谷派の中で、沖縄に向き合おうという動きが出てくることは大変うれしく思います。そして、これから具体的にどんなアクションが生まれるのか、一人のウチナンチュとして期待したいと思います。

南無阿弥陀仏
(照屋)



真宗大谷派による
「非戦決議2015」

成道会

二〇二三年十二月二日、
 沖縄別院で「成道会記念講
 演」と、沖縄菩提樹苑で
 「成道会法要」が行われ
 た。講演に先立ち、末広朋
 子さん、栄野川孝子さん
 による仏教讃歌が演奏され
 た。素晴らしい歌声に皆が
 聞き入り、専修学院卒の職
 員は音楽の授業で習ったも
 のばかりで懐かしく感じた
 と語った。引き続き今回は
 城端別院輪番の亀淵卓氏を

除夜の鐘撞き

今年も例年通り、東本
 願寺沖繩別院において十二
 月三十一日に除夜の鐘撞
 き、そしてそのまま年をま
 たいでの修正会が勤まっ
 た。数年前、「深夜寝てし
 まう小さな子供たちも鐘撞
 きがきるように」との要望
 で、今回も十九時から鐘撞
 撞を行った。アパートの住
 人同士で、家族で、友人達
 で、と様々な方々の足音が
 止まることなく、百名を大

お招きし、ご話話いただいた。
 講題は「人參が大根が
 出番を待っている」。何と
 も興味の湧くもので、たく
 さんの参拝のもと、お聞か
 せいただいた。法話後の質
 問時間にも、日々の生活の
 中での悩みや、思いなど、
 率直な意見が出る中、真摯
 にお応えをいただいた。菩
 提樹苑での法要は毎年雨が
 続いていたが、今年は暖冬
 の影響か暖かく、参加者は
 多くはなかったが、無事つ

大きく超える参拝があった。
 修正会は別院所属の僧侶の
 出仕で勤まった。勤行だけ
 でなく、対応できるスタッ
 フの数が少ない中、共に運
 営していただいた。
 また毎年参拝いただき、
 常連となった方々が、今年
 初めてお参りされた方を案
 内してくれたり、順路など
 を教えてくれたりと、その
 風景は沖繩別院修正会の定
 番となっている。来年から
 もこれまで参拝していただ
 いている方、新しく参拝を

とめることができた。平和
 への願いを込め沖縄へ分木
 された菩提樹。いつまでも
 大切にしたい。



沖縄菩提樹苑にて

したい方に向けても、より
 意義のあるものにするた
 め、創意工夫が必要と感じ
 ている。



修正会の様子



「グリーンフ」について

宗門でも昨今、「グリーンフケア・グリーンフワーク」ということが扱われるようになった。沖縄別院においても設立当初から「値遇の会」として月一回、グリーンフワークの会を開催している。また沖縄県内で活動している「グリーンフワークおきなわ」という団体にも参加しており、ここでは宗教を超えて様々な人たちがかわりボランティアで運営している。

「グリーンフ」とは一般に「悲嘆」と訳され、大切な人を亡くした悲しみのこととされる。そしてそこからうまれる悲哀や思慕、辛さ、苦しみを抱える人々が集い、安心できる聞き手（ファシリテーター）がいる場で、亡き人への想いや、悲しみをお互いに聞き合う。そのなかで自らのグリーンフに向き合っていけるように持たれる場が「グリーンフケア・ワーク」と呼ばれる。

「グリーンフ」と横文字で書かれると、最近できた概念だと思われがちだが、仏教では大昔から同じことをしてきたのではないだろうか。お葬儀から始まる、七日ごとの中陰、満中陰、百か日、年忌法要。これらに置き換えると、各節目に親族が集まり、法話の後には僧侶が聞き手となって、故人への想いや、思い出を語る。お念仏を申しながらのそうした会話の中で、ふと自らの中にある悲しみが、思いもよらず大切なものになり、気づききっかけになったり、有難くも頭の下がる思いになったりする。

新しく外国から入ってきたものだと思ったら、実は元々、先達方が紡いできてくださった「真宗の儀式」がそのなかみであるならば、と考えると、益々「皆共に」というお念仏の教えに、わが身を聞いていかなければという思いになる。

駐在教導 西田 和正